

ザクセン・アンハルト州の縮小政策に関する研究

服部 圭郎

要 約

東西ドイツが再統一してから、旧東ドイツの各州は人口の減少が止まらない。再統一して以来、旧東ドイツの170万人の住民が旧西ドイツへと移動した。これは、全体の人口の12%にも相当する。その中でも特に減少が激しいのはザクセン・アンハルト州であり、1995年の人口は300万人であったが、2060年には半分の150万人になると予測されている。本論では、このような人口減少に対して、同州および同州内の自治体がどのような対策を試みているのかを、特に2002年から開始したIBA ザクセン・アンハルト事業を中心に整理する。同州は縮小時代において必要とされるのは、「将来へのビジョン」、「創造性」、「試みる勇気」と位置づけ、自治体ごとに多様な取り組みを展開している。その成果はまだ顕在化していないが、多くの縮小地域を抱える日本にとっても、縮小に対する取り組みや姿勢を理解することは示唆するものが大きいと考えられる。

1. ザクセン・アンハルト州の概要

1. 1. 地理的概要

ドイツの16州（そのうち都市州は3州）の一つであるザクセン・アンハルト州は旧東ドイツ州に含まれ、ドイツ北東部に位置し、西はニーダーザクセン州、東はブランデンブルク州、南はテューリンゲン州とザクセン州に接している。その面積は約2万キロ平方メートルで、人口は約237万人（2009年3月31日時点）。人口密度は一平米当たり116人であり、これはメクレンブルク・フォアポンメルン州そしてブランデンブルク州に次いで低い。

同州は東西ドイツ再統一によって新しくできた州であるが、戦前のドイツでいえば、エルベ川とザーレ川を中心に広がる中部ドイツ地方となる。西方にはハルツ山地、東端にはフレーミングと呼ばれる低い丘陵地が広がるが、全般的には平地である。

表2にザクセン・アンハルト州の県の概要を示す。ザクセン・アンハルト州には14の県があり、そのうちデッサウ・ロシュラウ、ハレ、マグデブルグは都市県である。これら都市県の面積は小さいが、総じて人口密度は高い。ただし、ロシュラウ市と合併したデッサウはその人口密度はマグデブルグ、ハレに比べて低く、この二大都市とは様相が異なる。

県の人口規模は最小がデッサウ・ロシュラウの9万2千で最大はハーツ県の24万7千人である。それほど人口での大小の差はない。

表1 ドイツ13州の概要（都市州を除く）

	面積 (km ²)	人口 (2009)	人口密度 (2009)
ザクセン・アンハルト州	20446	2373485	20446.0
ザクセン州	18413	4162265	18413.0
ザールラント州	2569	1022585	2569.0
シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州	15799	2832232	15799.0
テューリンゲン州	16172	2249882	16172.0
ニーダーザクセン州	47618	7931000	47618.0
ノルトライン・ヴェストファーレン州	34083	17872763	34083.0
バイエルン州	70549	12497781	70549.0
バーデン・ヴュルテンベルク州	35752	10747905	35752.0
ブランデンブルク州	29577	2512300	29577.0
ヘッセン州	21115	6063683	21115.0
メクレンブルク・フォアポンメルン州	23173	1664000	23173.0
ラインラント・プファルツ州	19847	4020917	19847.0

出所：ドイツ連邦政府

表2 ザクセン・アンハルト州の県の概要

県名	面積 (km ²)	人口 (2005年)	人口予測 (2015年)	人口増減率予測	人口密度 (2005)
Stadt Dessau-Roßlau	245	92339	78681	-15%	377
Stadt Halle (Saale)	135	237198	206120	-13%	1757
Stadt Magdeburg	201	229126	208272	-9%	1140
Altmarkkreis Salzwedel	2,292	96040	78566	-18%	42
LK Anhalt-Bitterfeld	1,452	190771	136579	-28%	131
LK Börde	2,366	190080	160299	-16%	80
Burgenlandkreis	1,414	207727	152032	-27%	147
LK Harz	2,104	247490	209149	-15%	118
LK Jerichower Land	1,577	102402	80343	-22%	65
LK Mansfeld-Südharz	1,449	163620	115734	-29%	113
Saalekreis	1,433	208094	184716	-11%	145
Salzlandkreis	1,426	226593	164480	-27%	159
LK Stendal	2,423	131267	96114	-27%	54
LK Wittenberg	1,930	146969	105152	-28%	76
合計	20,477	2469716	1976237	-20%	121

図1 ザクセン・アンハルト州の位置



図2 ザクセン・アンハルト州の県

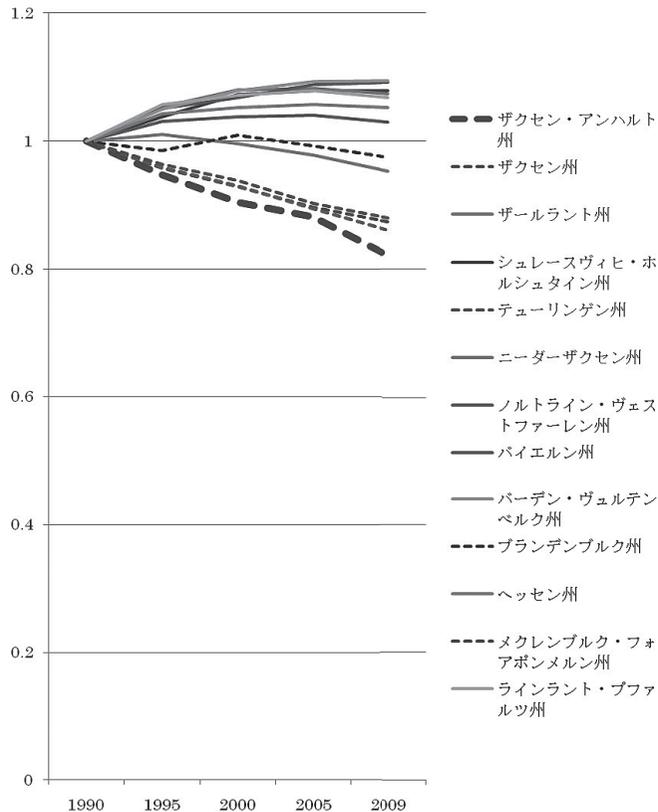


出所：ザクセン・アンハルト州資料

1. 2 人口動向

図3にドイツの都市州を除いた13州の人口変化を示す。1990年を1とした場合、2009年において1990年より人口が減った州は6州。そのうち5州が旧東ドイツの州である。その中でも、ザクセン・アンハルト州は18%も人口が減少しており、13州の中でも最も人口が減った州である。特に最近になって人口の減少が加速化しており、旧東ドイツの中でも人口減少が最も深刻な状況にあることが分かる。

図3 ドイツ13州の人口変化（都市州を除く）



出所：ドイツ連邦州資料

このように旧東ドイツにおいて人口が急激に減少したのは、ドイツ再統一後から20年経っても東西格差が縮まらなかったためである。ドイツ再統一後、ドイツ政府は旧東ドイツの復興に巨額の資金を投入した。1991年から12年間、旧西ドイツは毎年GDPの約4%に相当する額、総計で1兆4千億ユーロ（約196兆円）を注ぎ込んでいる。それにも関わらず、ほとんどの西側企業は旧東ドイツに投資をすることはなく、社会主義時代から失われた国営企業での雇用を補うような新たな雇用は創出されなかった。その結果、1991年には10%であった旧東ドイツの失業率は2004年には19%にまで跳ね上がってしまった。2003年時点においても、依然として旧東ドイツの生産性は旧西ドイツのそれの71%にしか過ぎない。加えて、旧東ドイツの状況を不利にしているのは、経済のボーダーレス化現象であるとドイツ在住のジャーナリスト熊谷徹は指摘する⁽¹⁾。「冷戦の

表3 ドイツ13州の人口密度の変化（1990-2009）

	人口密度（2009）	人口密度（1990）	人口密度変化
ザクセン・アンハルト州	116.1	124.7	-0.07
ザクセン州	226.1	232.1	-0.03
ザールラント州	398.0	408.8	-0.03
シュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州	179.3	179.3	0.00
テューリンゲン州	139.1	144.4	-0.04
ニーダーザクセン州	166.6	167.9	-0.01
ノルトライン・ヴェストファーレン州	524.4	529.8	-0.01
バイエルン州	177.2	176.7	0.00
バーデン・ヴュルテンベルク州	300.6	300.3	0.00
ブランデンブルク州	84.9	86.5	-0.02
ヘッセン州	287.2	288.5	0.00
メクレンブルク・フォアポンメルン州	71.8	73.7	-0.03
ラインラント・プファルツ州	202.6	204.5	-0.01

出所：各州資料

終結とともに、中東欧諸国も自由市場経済に加わり、旧東ドイツよりも労働コストが低い国々が誕生したのである。このため多くの西側企業が、旧東ドイツを素通りして、チェコやポーランド、ルーマニアなどに工場を作っている。旧東ドイツでの投資が政府の期待通りには進まず、雇用が増えない原因は、正にそこにある」。

人口縮小を起因とする課題の一つは人口密度の低下である。人口密度の低下は、地域における活力の低下を促していくだけでなく、行政サービス・コストを増大させ、自治体財政を逼迫させる。Akbar と Kremer は、人口密度こそ真の都市文明的なものの要素であり、その喪失はヨーロッパの都市の本質的な特徴を失わせると警鐘を鳴らしている⁽²⁾。表3に都市州を除いた13州の人口密度の1990年から2009年の変化を示した。ザクセン・アンハルト州は最も人口密度が減った州であり、この20年近くで人口密度が7%ほど減少し、そもそも低い人口密度（13州3番目に低く、ノルトライン・ヴェストファーレン州の4分の1程度）が、さらに低くなっている。前述したように人口密度の低下による「都市的なもの」の喪失が今後、危惧される。

1. 3 地域構造

表4にザクセン・アンハルト州の人口規模の大きい都市の上位10位までを示す。ザクセン・アンハルト州で最大の人口を擁する都市はハレで、次いで州都のマグデブルクが続く。この二都市で州の人口の20%を占める。ただし10万人以上の都市はこの二都市だけで、デッサウ・ロシュラウを除けば5万人以上の都市も存在しない。ザクセン・アンハルト州は多くの中小都市によって構成されている。図4に人口規模の大きな都市の順番に左から都市の人口を示したが、これより、前述の二都市、そしてデッサウを除くと人口規模が5万人未満の中小都市が多く存在していることが理解できる。

(1) 熊谷徹、『ドイツ病に学べ』新潮選書、2006 (p.79)

(2) Omar Akbar and Elisabeth Kremer, "Shrinking — A Challenge for the European City" in "Die anderen Städte" Band 1.

図5にザクセン・アンハルト州の人口配置を示す。北半分とハルツ山地に接する南西部に人口希薄地域が広がっていることが分かる。また、都市集積が回廊状に発達していないことが読み取れる。

表4 ザクセン・アンハルト州の人口規模の大きい都市の上位10位

都市	人口 (2008)	人口 (2000)
ハレ	233013	247736
マグデブルク	230047	231450
デッサウ・ロッシェラウ	88693	98563
ルターシュタット・ヴィッテンベルク	47695	48972
ビッターフェルト・ヴォルヘン	46971	54307
ハルベルシュタット	44151	41417
シュテンドル	43388	39795
メルセブルク	36075	37127
ベルンブルク	35888	33825
ヴェルニゲローデ	35041	35013

図4 ザクセン・アンハルト州の人口規模の大きい都市

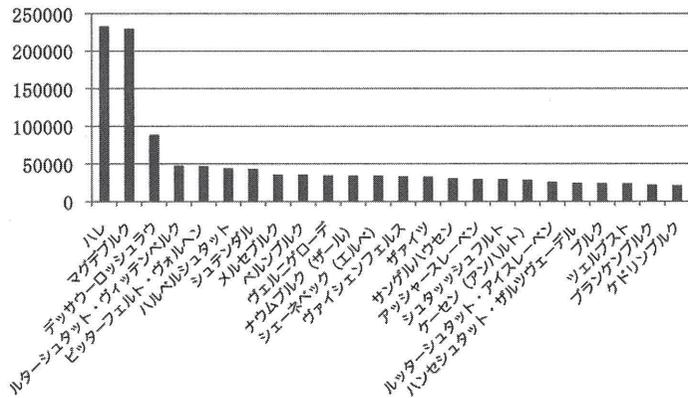


図5 ザクセン・アンハルト州の人口配置



1. 4 人口縮小の状況

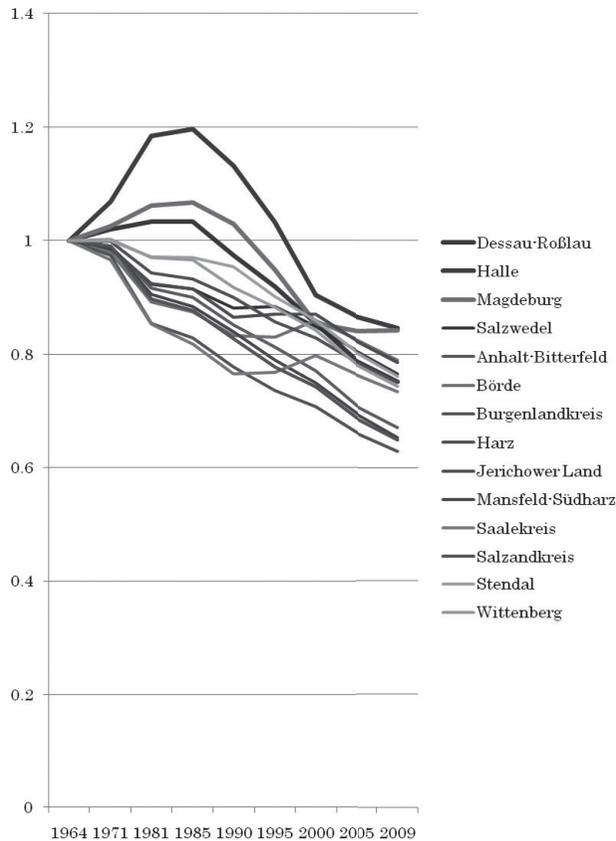
図6に1964年を1とした県ごとの人口推移を示している。すべての県が減少しているが、1964年を起点とするとハレ、マグデブルクといった二大都市の人口減少率は他の県に比べるとそれほど大きくない。これらの二都市とデッサウ・ロシュラウは、旧東ドイツ時代はむしろ人口が増加しており、東西ドイツが再統合されて以降、人口が減少し始めた。

最も人口が減少しているのは、ビュルゲンランドクライスで、次いでザルツアンドクライス、マンسفェルト・スードハルツ、アンハルト・ビッターフェルトなどであり、これらの県は旧東ドイツ時代も一貫して人口が減少していたことが分かる。

東西ドイツの再統一後の影響をみるために、図7では1990年を1として人口の増減率をみた。これより、東西ドイツの再統一後に最も人口減少を経験した県はハレ、デッサウ・ロシュラウなどの大都市であることが分かる。マグデブルク県も再統一後から10年間は大幅に人口減少がみられたが、2000年以降は人口は安定している。

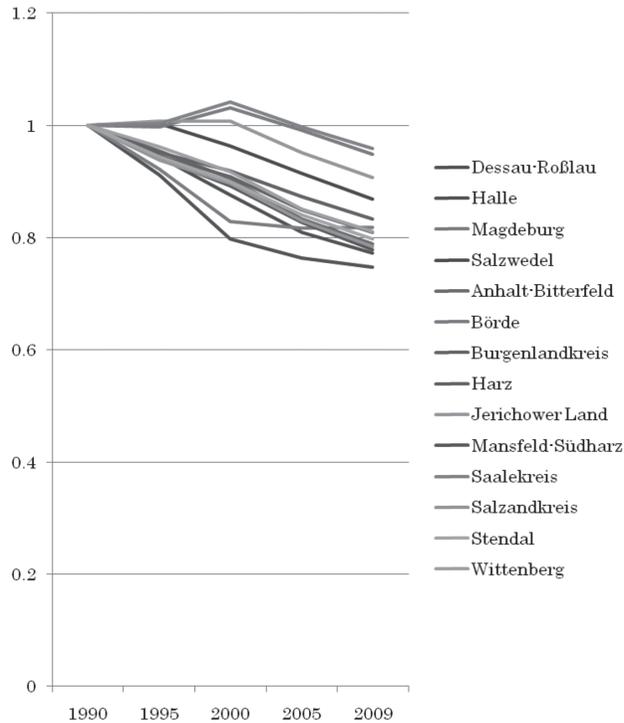
またザーレクライス、ビュルデは再統一後の10年間はむしろ人口が増加したが2005年以降は人口が減少するようになっている。ザーレクライス、ビュルデはともにハレ、マグデブルクの郊外

図6 1964年を1とした県ごとの人口推移



出所：ザクセン・アンハルト州資料

図7 1990年を1とした県の人口推移



出所：ザクセン・アンハルト州資料

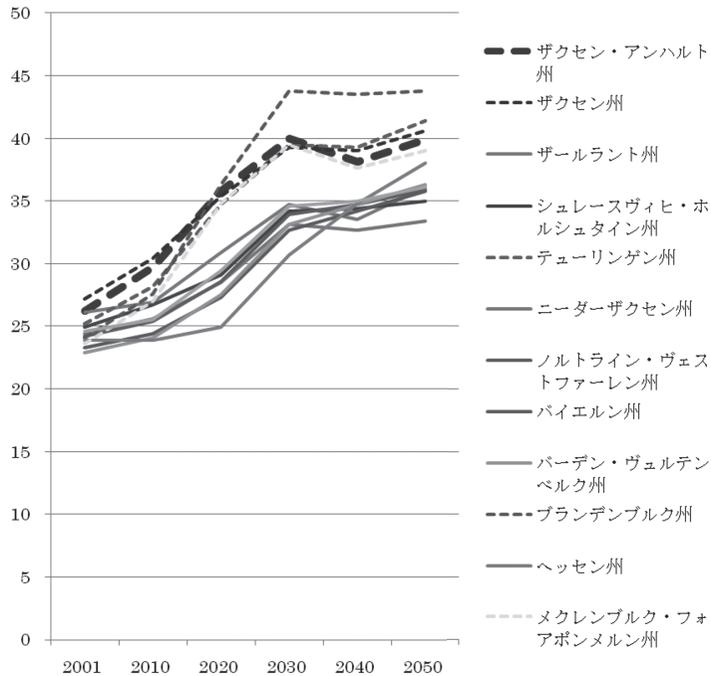
部にあたる自治体を有し、再統一後の10年間はこれらの都市の郊外住宅開発による人口増加がみられたが、郊外化も沈静化したことや、都心への回帰現象なども最近ではみられるようになったことから、その人口も増えなくなると推察される。

1.5 高齢化

ザクセン・アンハルト州は若者の社会減、そして自然減により高齢化が進展している。現在の60歳以上の人口比率は29%、そして2020年には35%を越えると予測されている。

図8はドイツの都市州を除く13州の60歳以上の人口比率の将来推計を示したものである。点線は旧東ドイツの州である。これより、旧東ドイツでは旧西ドイツに比べて早いペースで高齢化が進展することが分かる。ザクセン・アンハルト州も旧東ドイツの中では高齢化が突出している訳ではないが、2030年頃から60歳以上が占める割合が4割近くになる。

図8 ドイツの都市州を除く13州の60歳以上の人口比率の将来推計



出所：Statistisches Bundesamt, Wirtschaft und Statistik 8/2004 “Bevölkerungsentwicklung in den Bundesländern bis 2050”

1. 6 経済動向

表5にドイツの各州の人口当たりのGDPを示したが、これよりザクセン・アンハルト州はドイツ平均の7割にも満たず、ブランデンブルク州、チューリングゲン州、メクレンブルク・フォアポンメルン州などの旧東ドイツの州とともに経済的には劣っている州であることが分かる。2005年の同州の生産高は500億ユーロであった。

このような現状はザクセン・アンハルト州にとっては屈辱的である。なぜなら、ナチス政権が登場する以前の1932年頃までは、この地方こそが中部ドイツの工業の中心であったからである⁽³⁾。ドイツ再統一直後でもヴォルフエン・ビッターフェルト地区の化学工業は、ドイツ最大規模を誇っていた。しかし、ドイツ再統一後、ハレ、ビッターフェルト、ロイナ、ヴォルフエン、メルゼブルクといった化学工業と褐炭産業の中心であった都市・地域は、産業構造転換により疲弊し、縮小が激しい。これには、旧東ドイツ時代の時代遅れの産業資本による競争力のなさに加え、当時の誤った産業政策により、環境破壊がかなり進んでしまっており、その浄化に多大な投資が必要とされるため、再投資するインセンティブが極めて低いことも挙げられる。

一方でザクセン・アンハルト州は農業に適した豊かな黄土（レス）の土壌であることで知られ

(3) 『辞典現代のドイツ』 p.733

表5 ドイツの各州の人口当たり GDP

州名	人口当たりの GDP (ユーロ) 2004	ドイツ平均に対しての割合
Baden-Württemberg	29,805	1.129
Bayern	30,952	1.173
Berlin	22,982	0.871
Brandenburg	17,533	0.664
Bremen	35,554	1.347
Hamburg	45,417	1.721
Hessen	32,007	1.213
Mecklenburg-Vorpommern	17,317	0.656
Niedersachsen	23,112	0.876
Nordrhein-Westfalen	26,634	1.009
Rheinland-Pfalz	23,489	0.890
Saarland	24,659	0.934
Sachsen	18,584	0.704
Sachsen-Anhalt	18,361	0.696
Schleswig-Holstein	23,512	0.891
Thuringen	17,947	0.680
Deutschland	26,388	

ている。特にマグデブルグ周辺は、ドイツだけでなくヨーロッパでも最も肥沃な土地であると言われている。小麦、ビート、野菜が栽培されている。農業とともに農産加工食品業も盛んである。

旧東ドイツ時代の大規模工業は時代遅れのものであった。また、仮に近代化をすることが経済的に合理性をとまっても、その近代化によって雇用はむしろ減少することになる。工業都市が擁していた産業連関ネットワークは崩壊し、単機能的な産業しかもはや残っていない状況にある。特にダメージが大きかったのは単一産業しか有していなかった小さな都市である。そのような場合、その都市はこの単一産業に過度に依存していたため、その産業が縮小、喪失することで、その都市の存在意義、アイデンティティといったものまで失われた。それは、そこで生活する住民に少なくないダメージを与えることにもなった。

雇用の不足、そして将来への展望のなさは、ザクセン・アンハルト州から多くの人々を去らせることになった。特に若い女性や学歴のある若者が多く去ることになる。その結果、企業サイドからすると、優良な労働者の確保が難しくなり、その進出に二の足を踏むなどマイナスのスパイラル状態に同州は陥ってしまっている状況にある。

2. ザクセン・アンハルト州の縮小政策

2. 1. Stadtumbau Ost

ザクセン・アンハルト州も他の旧東ドイツの州と同様に2002年から Stadtumbau Ost の対象事業を展開している。Stadtumbau Ost とは、2002年から2009年までにかけて行われた事業で、名称を直訳すると「都市改造—東」と訳されるが、実質的には縮小政策を遂行する自治体を対象として25.6億ユーロの予算を補助する事業である。

その内容は2010年までに旧東ドイツの340の自治体を対象に35万戸を倒壊するというものである。これはドイツの住宅政策の歴史の中で、初めて住宅を「倒壊」することを目的としたプログラムであった。これは、成長を管理することから、計画立てられた縮小を目指すことになり、大きな政策的転換を示唆している。

倒壊することを判断した背景には、1)供給過多となっている住宅市場を正常化させるため、2)都市的な要素を維持できるコンパクトな都市構造を誘導するため、の大きく二つの理由があった⁽⁴⁾。

そして計画どおりに、2009年までに35万戸の建物を倒壊したが、住宅市場は依然として冷え切っており、さらに2016年までに20万戸を倒壊することを決定した。

ザクセン・アンハルト州では、2005年時点でプラッテンバウと呼ばれる社会主義時代に大量につくられた集合住宅を中心に20万戸が空き室になっており⁽⁵⁾、Stadtumbau Ost のプログラムで2010年4月までで総計約6万の住宅が倒壊された⁽⁶⁾。同州は4.75億ユーロの補助金を受けとっている。ザクセン・アンハルト州の住宅戸数は2001年の133万4804戸を最大として、以後減少傾向にあり、2009年には130万9260戸となっている。

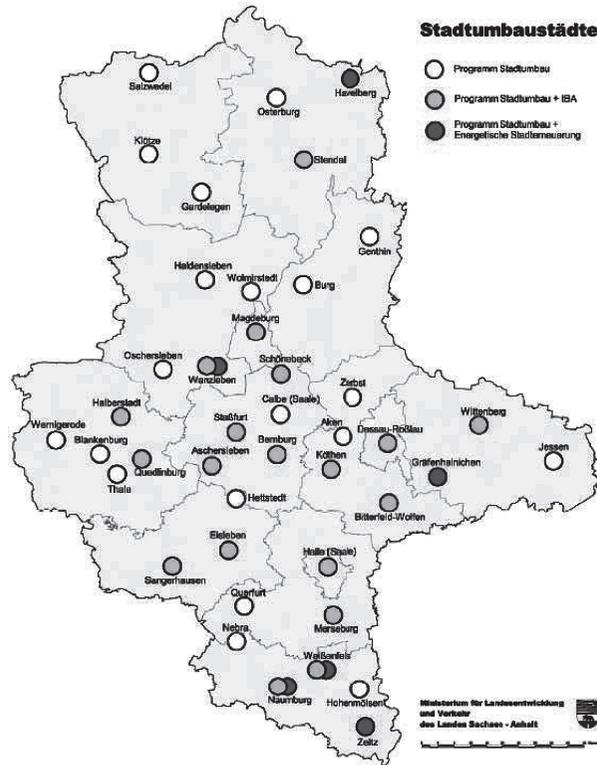
図9に Stadtumbau Ost のプログラムに参画しているザクセン・アンハルト州の自治体と IBA ザクセン・アンハルトに参画している自治体を示す。IBA ザクセン・アンハルトに参画している自治体はすべて Stadtumbau Ost プログラムにも参加している。Stadtumbau Ost のプログラムには、通常の「都市改造プログラム」と「エネルギーギッシュな都市再生プログラム」と二通りある。前者だけに取り組む自治体は20、前者と IBA ともに取り組む自治体は16、後者に取り組みかつ IBA にも取り組む自治体は3、後者だけに取り組む自治体は3で計45の自治体が Stadtumbau Ost のプログラムに参画している。

(4) Bernt, "Six Years of Stadtumbau Ost Programme"

(5) Kal-Heinz Daehre, "Demographic Change, the Goals of Urban Redevelopment and the IBA" in "Die anderen Städte"

(6) ザクセン・アンハルト州のホームページ (http://www.sachsen-anhalt.de/LPSA/fileadmin/Elementbibliothek/Bibliothek_Politik_und_Verwaltung/Bibliothek_MBV/PDF/Bauen_und_Wohnen/Abriss_14_06_2010.pdf)

図9 Stadtumbau Ost もしくは IBA ザクセン・アンハルトに参画している自治体



出所：ザクセン・アンハルト州資料

2. 2. IBA ザクセン・アンハルト事業

ドイツの都市・地域計画手法に、国際建設展というイベントがある。国際建設展とは International Bauausstellung の日本語訳であり、国際建築展や国際建設博覧会とも訳される。一般的には IBA と略されており、イーバと発音される。1901年に第一回目がダルムシュタットで開催されてから、1927年にはシュツットガルト、1957年、1984年には西ベルリン、1989年からはルール地方のエムシャーパークで開催されてきた。この IBA はドイツの都市・地域計画に大きな影響を与えてきたが、特に1984年の西ベルリン、1989年のエムシャーパークはその後の都市・地域計画のアプローチに変革とも呼べる影響を与える。1984年の西ベルリンでは市民参加のボトム・アップ的な手法を導入し、その後、普遍化させる。また、1989年のエムシャーパークでは、マスタープランという指針を持たず、代わりに設問を設定し、これらの設問に対する解答をプロジェクトごとにコンペによって募集し、それを選定して実践するという方法論を採用する。すなわち、その解答を模索するという過程を通じて、将来への道筋を見出そうとしたのである。この手法は、課題の処方箋としての即効性としては多くが期待できなくても、人々を課題に向き合わせ、その課題を診断、分析し、その課題の解決に取り組ませる方向に協働させるという点においては、絶大なる効果をもたらした。このような多様なプレイヤーを協働させるという新たな IBA の可能性を提示したという点でエムシャーパークはエポック・メイキング的なアプロー

チとして評価されている⁽⁷⁾。

そして、縮小する地域という前代未聞的な難しいテーマを抱えるザクセン・アンハルト州は、このIBAの「多様なプレイヤーを協働させる」という点に期待し、IBAザクセン・アンハルト事業を2002年から開始する。同事業は、「縮小問題」という極めて対応が難しいテーマを取り上げただけでなく、それまでのどのIBAよりも広域にわたる州全体を対象地域としている。これは、各自治体が個々にこの問題に対して戦略的に対応することは難しく、州全体で取り組み、共通の場で効果的なアイデアやツールなどを考え、研究することが効果的であると考えられたからである⁽⁸⁾。目標年次は2010年とした。IBAザクセン・アンハルトは同州に点在する19の都市および町を展示場として実施される。

IBAザクセン・アンハルトのコンセプトは「少ないことはより多いこと (less is more)」⁽⁹⁾。これは、同州にあるバウハウス・デッサウ協会 (Bauhaus Dessau Foundation) の提案を受けたことによる。そして「成長なき開発」すくなくとも量的な成長をしないでどのような開発が可能であるのかを検討することにしたのである。IBAザクセン・アンハルト事業は、バウハウス・デッサウ協会、ザクセン・アンハルト州開発公社 SALEG (Sachsen-Anhalt inische Landesentwicklungsgesellschaft mbH) が協働して実践することになった。

都市開発という言葉から多くの人が連想するものは「成長」および「拡大」である。しかし、縮小の時代に都市に「再開発」が果たして妥当なのか、という疑問がこの事業の背景にある。同事業に通底する考えは、「都市生活の質そして経済生産性は人口の増加や土地利用ではなく、サステイナブル・プロジェクトの質の向上によって図られる」というものであり、これによって初めて人口の縮小は緩やかになると捉えている。そして、同事業における重要なキーワードとして、「建設しない」、「インフラストラクチャー」、「空き家の倒壊」の3つを挙げている⁽⁹⁾。また、人口の縮小化においては、縮小していくプロセスが進んでいく中、いつまで「都市」という形態が維持できるのか、ということが重要な質問として提示されている⁽¹⁰⁾。

IBAザクセン・アンハルト事業に参加している自治体は、縮小は「形づくる」ことができることを示したいと考えている。人口が縮小している状況においても、質は向上させることが可能であることを示したいと考えているのだ。IBAザクセン・アンハルト事業はある意味では、壮大なる社会実験と捉えることができる。先達のIBAエムシャーパーク事業がそうであったように、地域が直面する壮大なる課題の解決法を見出すためにIBAという従来からのドイツの都市・地域創造事業をこのザクセン・アンハルト州でも試みたのだ。しかし、縮小に意味をもたらせる都市・地域開発とはどのようなものであろうか。このテーマが、極めて難題であることは確かである。

(7) 服部圭郎, アプローチ2010年秋号「IBAの伝統と現在」

(8) アプローチ2010年秋号「フィリップ・オスワルトの取材記事」

(9) 2009年2月18日にブリュッセルで開催されたEU委員会主催の講演会でのIBAザクセン・アンハルト事業を代表してのソニヤ・ベエック氏の発言

(10) Torsten Blume, "New Urban Configurations" in "Die anderen Städte"

3. IBA ザクセン・アンハルト事業の内容

IBA ザクセン・アンハルトは州全体を対象としたが、実際のプロジェクトは同州に点在する19の自治体において展示される。これらの展示内容の概要を表6、またそれらの位置を図10に示す。起動時には、これらのプロジェクト数は15であったが、その後、17に増え、現在では19の自治体が参画している。

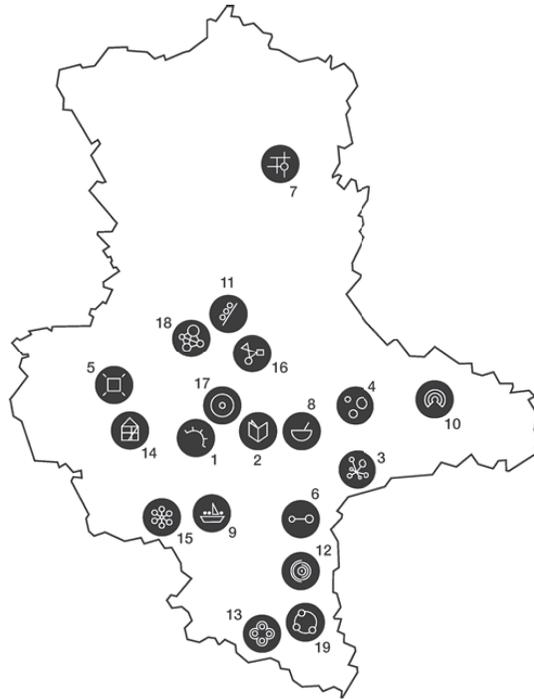
これらの19のプロジェクトをテーマ別に整理すると、広域的な地域デザインから局所的な都市デザインまでを網羅した従来型のIBAの空間開発アプローチのものが10プロジェクト、次いで「教育」が4プロジェクト、「観光」、「産業」がそれぞれ2プロジェクト、住宅開発が1プロジェクトとなる（図11参照）。1901年にダルムシュタットで開催された第1回目から1957年のベルリンで開催された第3回目のIBAまでは、まさにその時代の先端を行く技術や思想を反映させた「新しい」建築物を展示することが目的であったのだが、第5回目のIBA エムシャーパーク以降、

表6 IBA ザクセン・アンハルト事業の概要

地図番号	都市名	内容	テーマ
①	アッシャースレーベン	中心部の集積を図り、混雑しているリング・ロードをリデザインする	デザイン
②	ベンブルグ	コミュニティの教育文化を活かし、教育の最適な条件を創造する	教育
③	ビッターフェルト・ヴォルヘン	多極的な地域ネットワークの中で、効率的な開発を計画する	デザイン
④	デッサウ・ロシラウ	都市内の最高の地区を田園地域における都市の「島」として開発する	デザイン
⑤	ハルバーシュタット	「空白の空間」を肯定的なデザイン指針で向上させる	デザイン
⑥	ハレ	双子都市の性格を強調させた将来像を呈示する	デザイン
⑦	ケセン	この地区の伝統である同毒療法を活用した開発手法を検討する	産業
⑧	ルターシュタット・アイスレーベン	丁寧な修正事業で都市観光を改善させる	観光
⑨	ルターシュタット・ヴィッテンベルク	ヴィッテンベルク校舎の伝統を活かし、そこで文化、宗教などの対話を促すこととする	デザイン
⑩	マゲデブルク	「エルベ川と、そして共に生活する」というコンセプトで土地利用の創造的なアプローチを実践する	デザイン
⑪	メルセブルク	中心部の集積を図ることを目的とし、移民とその統合という課題を克服する	教育
⑫	ナウムブルク	都市教育をテーマとする	教育
⑬	ケドリンプルク	縮小という環境下において、世界遺産を保全しつつ、それを活用する	観光
⑭	ザンガーハウゼン	既存の住宅ストックを近代化し、再開発する方法を計画する	住宅
⑮	シューネベック	「都市核とランドスケープ」というテーマで検討している	デザイン
⑯	スタッシュフルト	カリウム鉱業で汚染されていたタウンセンターを再生する方法を検討する	デザイン
⑰	シュテンダール	効率的な都市システムの環境へ改善する	デザイン
⑱	ヴァンツレーベン	家族への機会を提供することを目的とした開発をする	教育
⑲	ヴァイシュエンフェルス	食品工業のポテンシャルを活用した開発をする	産業

出所：IBA ザクセン・アンハルトの資料に筆者が加筆

図10 IBAプロジェクトの位置



出所：IBA ザクセン・アンハルト

建設展という名称を掲げてはいるが、建築物によって新たな価値を地域に創造するといった本来の目的は希薄化されていた。この傾向は第7回目の本事業ではさらに進み、「建設しない」ということをキーワードにまで掲げている。その結果、既存の建物を倒壊して、新たなる空間的価値を創造するといったアプローチもみられ、「建設展」の定義をさらに拡張させることになった。広義の空間デザインという観点からでも「住宅開発」を含めて、全体の6割にも満たず、建築とは一見関係のなさそうな「教育」を解決アプローチとして採用したプロジェクトが4つもあることは興味深い。これは、その地域、コミュニティの持続性を高めるためには、そこで生活する人々が変わる必要があるという問題意識が背景にある。

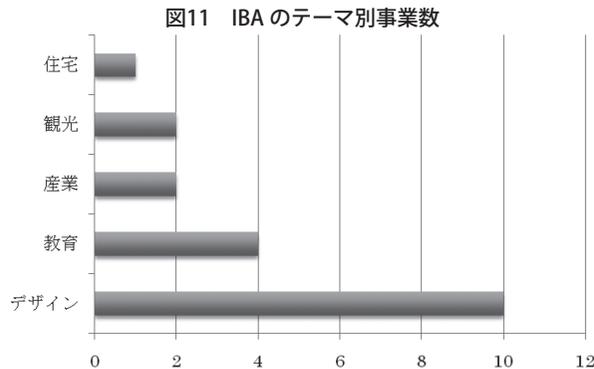
とはいえ、やはり都市デザインの事業が占める割合は多い。そして、それらのほとんどが公共空間の強化に力を入れている。その背景には旧東ドイツは社会主義時代の「公共性のない」公共空間に慣れており、公共空間で自由な都市の空気を楽しむといった利用の仕方をしない人が多いことがある⁽¹¹⁾。そのため、公共空間を都市の「居間」として利用することを促すような新たな空間整備が為されている（デッサウ、ハレ、ヴィッテンベルグ、マグデブルグ、スタッシュフルトなど）。

前述したように、同事業ではバウハウス・デッサウ協会が中心的役割を担っている。具体的にはバウハウス・デッサウ協会は、ザクセン・アンハルト州開発公社 SALEG と共同で IBA の事

(11) Walter Prigge, "The Origins of Shrinking. The Peripheralisation of Eastern Germany: An International Comparison" in "Die anderen Städte"



マグデブルグはエルベ川の河川という公共空間を人々に開放する都市デザイン事業を遂行している



業委託を受け、合併会社を設立し、この会社は、19都市がそれぞれの計画を立て、実行できるよう指導を行い、革新的なプロジェクトの開発や、ノウハウの共有などに取り組むようにした。バウハウス・デッサウ協会は、まず何回もセッションやディスカッション、ワークショップなどを開催し、全てのワークショップに市民も参加してもらい、そこでプロジェクトの基本構想や中心的なアイデアを出すようにした。そして、年に一度、IBAの委員会が各都市の活動に対する評価を行い、成功事例の公表、活動上の問題点の協議、翌年の目標や課題の設定などを行った。

そして最終年を迎えた2010年、IBA事務局では今までの活動について詳細に解説した本『Internationale Bauausstellung Stadtumbau Sachsen-Anhalt 2010 : Weniger ist Zukunft 19 Städte-19 Themen』を出版した。この本は850ページにも及び、個別のプロジェクトに関する検証、そして将来に向けたビジョンなどを掲載し、IBAザクセン・アンハルトの全体像を理解できるように編集されている。また、最終成果をバウハウス協会にて発表展示している。IBA事務局は機関としての役目を終えるが、州政府はIBA方式の有効性を認めており、残ったプロジェクトを完成させるためにIBA方式でフォローアップしていくことが期待されている⁽¹²⁾。また、これまでのIBAの事業のように、縮小都市・縮小地域を抱えるドイツ以外の国、地域、自治体に対して、何かしらの貢献ができることを念頭に置いて、事業を実施している⁽¹³⁾。

(12) アプローチ2010年秋号「フィリップ・オスワルトの取材記事」

(13) Jochen Korfmacher, "Urban Redevelopment as a Component of Reform" in "Die anderen Städte" .

4. 事 例

以下、これら19のプロジェクトの中でも特徴的なものを5つほど選び、その内容を紹介する。紹介するプロジェクトは、「デッサウ・ロシュラウ」、「ハレ」、「ケドリンバーク」、「アイスレーベン」、「アッシャーズレーベン」である。

事例1：デッサウ・ロシュラウ市

デッサウ・ロシュラウ市は人口7万8千人の都市である。ザクセン・アンハルト州の都市の御多分に漏れず、デッサウ・ロシュラウも最大10万人を擁した時点から20%以上もの人口縮減を経験している。そして、そのトレンドは今後も続いていくと推察されている。

デッサウ・ロシュラウのプロジェクトはそれまでの縮小計画とは違うアプローチを採用している。従来、都市の縮減計画を策定するうえでは都市の核を中心に周縁部から集約させてコンパクト化を図るのが常套であった。これは、交通の便が悪く、また中心市街地から距離もあり移動エネルギーの効率が悪い、行政サービス効率が悪い周縁部を犠牲にすることで中心部だけは生き残らせようとする政策である。このような方法論は、特に縮減が激しかった旧東ドイツの社会主義時代の産業都市であるアイゼンヒュッテンシュタットやホイヤスベルデなどで実践され、他の縮小都市もこれに倣い、中心部を維持する縮小計画を策定することになる⁽¹⁴⁾。

デッサウ・ロシュラウはこれとは異なる方法論を採用することになる。そのコンセプトは、「都市の島」と呼ばれる。これは、都市の中心部に市街地を集約させず、市内において活力がある地区を残し、縮退が生じている地区を緑地へと転換していくという方法論である。都市力とでもいうべき活力のある地区の活力が衰退することを防ぎ、そのために、人口が減少し空き家が生じたり、工場が閉鎖したりしたような場所はむしろ積極的にその縮小を促進させるという考えである。縮退が



デッサウのIBA事業はバウハウス本校がその拠点となっている



プラッテンbau点の住宅を倒壊した跡地につくられたコミュニティ・ガーデン

(14) 服部圭郎、「旧東ドイツの都市の縮小現象に関する研究—アイゼンヒュッテンシュタットを事例として」(明治学院大学産業経済研究所『研究所年報』第23号, 2006年12月)

進んでいる都市では、地区によってある程度の差はあっても全体が縮小していく。縮小都市におけるドイツの処方箋は、都市の全地域が緩やかに縮小していくことを防ぐために、都市として残すべき地区（都市地区）とそうでない地区（非都市地区）とに二分し、非都市地区から都市地区へと移住を図ったりして、都市地区の縮退を回避するというものである。その方法論としては、前述したようなアイゼンヒュッテンシュタットなどの中心市街地へ集約する場合や、公共交通へのアクセスがよい場所へ集約させるコトブス市の事例などがあったのだが、デッサウはいわば都市内の「健康な部分」を残すという新しい観点から、都市の縮小プロセスを計画している。

このような考えがデッサウで提案された理由としてバウハウスの存在がある。デッサウはヴァイマルで1919年にグロピウスが設立したバウハウスが1925年に移転してきた都市である。デッサウに移転してきたバウハウスは、グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、ヨハネス・イッテンといった蒼々たる教授陣を擁したが、ナチスにより閉校させられる。このデッサウのバウハウスは、ドイツ再統一後、再び1999年に実験的教育機関として校舎が利用されることになる。IBA ザクセン・アンハルトの事業として、その縮小計画を策定することになった時、バウハウスはデッサウ・ロシュラウ市と協働して取り組むことになった。バウハウスの現校長は縮小都市研究所の所長を務め、若くしてドイツの縮小都市研究の第一人者となったフィリップ・オスワルト氏である。そのような背景を有したために、都市の縮小の実態をより多面的に分析して、縮小しているのだから、とりあえず他都市のように中心部に集約させようという安易な判断をしなかった。

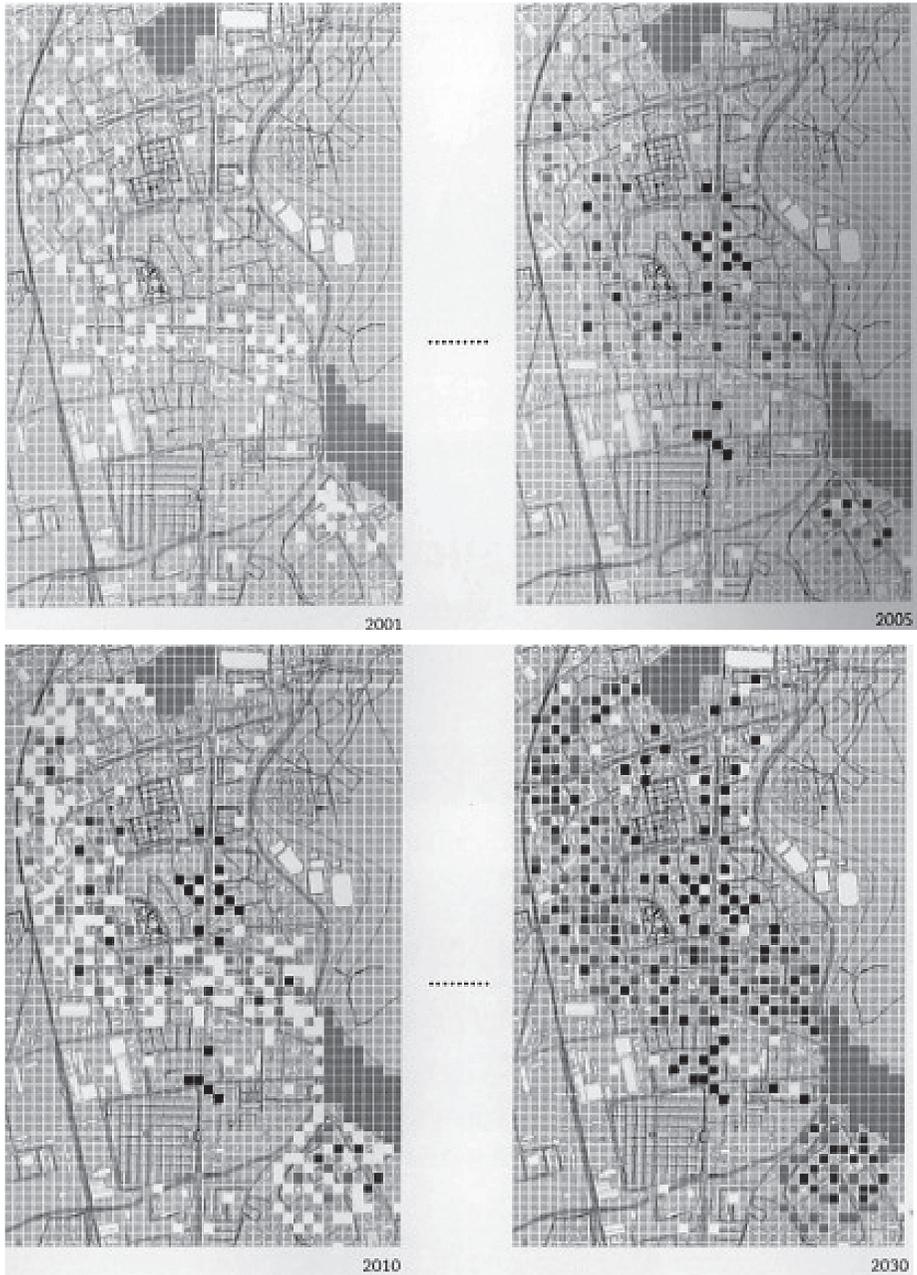
加えて、デッサウの都心部は第二次世界大戦でほとんど破壊されたこともあって、それほど他地区に比べて相対的に魅力が高くなかったこと、市内の幾つかの地区はそれなりの集積が維持できていたこと、そして衰退が進んでいる地区は市内に散在しているというよりか連続性をもって繋がっていたことなどが挙げられる。さらに、デッサウの東には2000年に世界遺産に指定された「庭園王国」がある。これは大陸ヨーロッパで初めてつくられた英国式庭園であり、その面積は14500ヘクタールと巨大である。エルベ川の支流沿いに位置していることもあり、水を庭園の設計において見事に活用している。この「庭園王国」の存在が、ランドスケープに対しての高い評



デッサウのIBA事業は、縮小していく中、市内に分散する市街地の幾つかのコアを残し、その他を緑地化するというアプローチを採っている。そして、緑地化のプロセスにおいて必要性が低下した道路も緑に戻すような試みもしている。しかも、それが以前は道路であったという記憶が次代に継承するために、一部、道路の舗装部分を意図的に残している

価、開発をしないでオープン・スペースの状態であることを肯定的に捉えるという意識を市民が共有する背景にあったと推察される⁽¹⁵⁾。

これらの計画を推進するうえではデッサウ・ロシュラウ市が土地を購入した。この購入が実現できた背景には、土地の値段がそれほど高くなかったこと、また旧東ドイツの社会主義体制では土地の私有が行われていなく、東西ドイツ統合からそれほど時間が経っていないので、地主がそれほどいなかったことが挙げられる⁽¹⁶⁾。



デッサウ・ロシュラウ市の縮小計画のシナリオ図（2001年，2005年，2010年，2030年）

事例2：ケドリンプルク

ケドリンプルクはハーツ山地の北部、ザクセン・アンハルト州の西部にある人口2万2千人の町である。ザール川の支流ボーデ川が町の東を流れており、9世紀の頃から人々が集住するようになる。90ヘクタールに及ぶ中心市街地は戦災をほとんど受けなかったために、14世紀に始まり5世紀に及ぶ違う時代の木組み家屋が存在する。同市には6世紀に及ぶ1300戸の木造家屋が存在する。しかし、これらのうち250の家屋は空き家状態であり、今でも朽ち果てそうな状態にあった⁽¹⁷⁾。

1994年には丘の上に立つ教会とともにケドリンプルクは、「人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例」として世界遺産に指定された。世界遺産の指定は、伝統家屋を保存することの是非の議論に終止符を打つことになった。それは地域を活性化させる大きな機会となると同時に、市民は一方では重大な責任を負うことにもなったのである。

しかし、世界遺産に指定されはしたが、それにどのように対処するかということの方向性はなかなか定まらなかった。この状況を大きく打破させたのが、IBA ザクセン・アンハルトである。IBA ザクセン・アンハルトは地主、商店主、一般市民、市役所の協働を促すプラットフォームとして位置づけられた。そして、都市のイメージを向上させること、ディズニーランドのようなテーマパーク化を回避しつつも観光業を定着させること、伝統的な街並みや家屋を保全・維持するための方法論を教育する場として位置づけることが、ケドリンプルクの将来課題であり、全市民が共有すべき仕事であると認識された。

IBA のプログラムは3つの分野に特に重点を置いている。まず、家屋や街並みに関する情報が集められた。そして、ケドリンプルクと同様にその街並みが世界遺産に指定された旧東ドイツのストラールズントとヴィスマールの管理計画を検証し、地域保全と経済開発とのバランスがとれたケドリンプルクの管理手法を作成しようとしている。さらに、ケドリンプルクが国際的にも世界遺産の保全、開発に関する先進事例として位置づけられるように企図し、学際的な交流、国際サマー・スクールの開講などの実現が模索されている。



旧市街地の広場



丘の上にある教会から旧市街地を望む

(15) Heike Brückner, "Transformation into the Unknown", in "Die anderen Städte"

(16) バウハウスの研究員 Heike Brückner, への取材による

(17) International Building Exhibition, Urban Development Saxony-Anhalt 2010



旧市街地に整備された歩行者専用ゾーン



ケドリンプルクの最古の木組み家屋



世界遺産に指定されたケドリンプルクの広場

事例3：ハレ

ザクセン・アンハルト州南部の中核都市であるハレは、ザール川を挟んで東に隣接している社会主義時代の1964年につくられた都市ノイシュタットと1990年に合併した。合併後の人口は23万5千人にまで膨らんだ。二つの都市は分離していただけでなく、その性格を大きく異にした。ハレは1200年の歴史を有した大学都市であり、第二次世界大戦の被災も少なかった。一方のノイシュタットは合併時には26年程度の歴史しかなく、10万人の居住者を想定した近代的な社会主義都市であった。この異なる性格の二つの都市の一体感を高めるために、二つの都市を結ぶ軸を強化することをIBAのプロジェクトとして位置づけ、この軸を中心として幾つかのプロジェクトを展開している。

奇跡的に第二次世界大戦の被害をあまり受けなかった旧ハレ市に比べて、社会主義国家時代につくられた旧ノイシュタット市はプラッテンバウという集合住宅団地の生活環境の悪化に歯止めがかけられない状況にある。そして、多くの住民がこのノイシュタットから移動を始めている。そのような縮小現象のマイナスの影響を最小限にするために、積極的に減築事業を展開したり、空間環境を改善するための試みを実施されたりしてはいる。しかし、その効果はあまり大きくなく、1200年以上の歴史の蓄積がある文化面で豊かな旧ハレ市の魅力を、この軸を通じて、40年の歴史しかない旧ノイシュタット市へも波及させよう、より一体化させよう取り組んでいる。この軸であるマギストラーゼを通じて、旧ハレ市も旧ノイシュタット市も同じ一つの都市であると

という一体感を醸成させようと務めているのである。

主なプロジェクトとしては次のような事業が実施、検討されている。

- ・ノイシュタット市の中心に若者のためのスケートボード公園を始めとしたレジャーパークの整備
- ・トゥルペンブルネン広場の再生
- ・移動現代美術館の開催
- ・都市の新たなシンボルとなるべくリーベックプラッツにおける高層ビルの建築
- ・空地における芸術・文化・教育活動の展開
- ・19世紀の建物が多いグラウチャ地区の修復事業の実施
- ・ノイシュタットとハレの境界にあたるザール川にあるサリネ島のレクリエーション機能の付加



ハレとノイシュタットを結ぶ回廊沿いに展開するプロジェクト



特に印象的なのは、ハレの中央駅と広場とを分断していた大通り周辺の空間作りである。大通りの暗い下部空間を明るくして、夜でも危険を感じずに歩けるような工夫がなされている



ノイシュタットのマギストラーゼ沿いに建つ社会主義時代の遺産ともいべき高層ビル



ノイシュタットのマグistraレーゼ



ノイシュタットのマグistraレーゼ沿いにある倒壊予定の集合団地



魅力的なライトアップが為されている道路の下部空間



中央駅と広場とを分断していた道路をうまく横断できるように、道路の下部空間のアメニティを高め、人々がアクセスしやすいような工夫がされている

ハレのプロジェクトは多くの市民参加を促すことに成功した。それらのプロジェクトは、課題と可能性を示すこととなり、これらを通じて、非人間的な空間としての問題は少なくないが、ハレとノイシュタットを連結させる大通りマグistraレーゼの将来像を人々が共有するきっかけとなった。

事例4：アイスレーベン

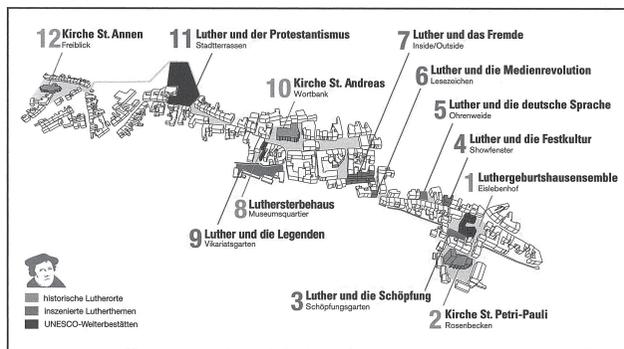
アイスレーベン は人口2万5千人ほどの都市でザクセン・アンハルト州の南に位置する。その歴史は9世紀まで遡る。特に12世紀から近くにある銅鉱山とともに発展してきた。銅鉱石による公害問題が二度おき、二度目の事件後、しばらくしてこの銅鉱山は閉山される。1990年には3万1千人の住民がいたが、2020年には1万8千人まで減るだろうと予測されている。同市はマルティン・ルターが1483年に生まれた都市かつ1546年に没した都市でもあり、世界遺産にも指定された美しい街並みを誇っている。しかし、旧東ドイツ時代にしっかりと維持管理されていなかったために、その魅力を発現させるためには多くの手直しが求められた。また、観光ルートとしての動線がこれまでつくられなかったので、IBAの事業を経緯として観光ルート「ルター・トレイル」を整備することから手がけることにした。

その背景には、社会主義時代には随分と歴史的街並みが破損され、多くの人がこの歴史的中心

市街地から去り、2005年にはその空き家率は18%にまで及んでおり、このような状態からいかにして、街並みを改善させるか、そして改善された街並みをいかにネットワークさせるかということ、どのように展示しているのか、ということが問われていたのである。アイスレーベン観光ポテンシャルが高く、国外からも観光客を呼び寄せるだけの魅力を有している。そのポテンシャルを発現するためにも、このルター・トレイル沿いに街並み整備、レストランや小売店舗などの開業をまず図っている。ルターの生家は2007年に修復され、隣接してデジタル・センターも新たに開設した。これはルター・トレイルの起点でもある。ルター・トレイルの終点は、ルターが没した家である。

現時点ではルター・トレイル、そしてルターの生誕地ということでアイスレーベンへの観光の関心は高まっている。特にアイスレーベンの歴史的な中心市街地のイメージは随分と改善されており、以前は人々に見放されていたところが、生活するうえで好ましい場所とさえ思われつつある⁽¹⁸⁾。

ルター・トレイルはアイスレーベン市の将来再生計画の一部でしかない。同市の将来再生計画は「よりコンパクト」、「より賢く」、「協調的」の3C (compact, cleverer, cooperative) がコンセプトとして掲げられている⁽¹⁹⁾。この計画を実現させるためにも、ルター・トレイルのセンシティブなアプローチによる成功は後押しとなったのではないかと推察される。



観光ルートの整備案



市役所広場



新しくつくられた情報センター

(18) International Building Exhibition, Urban Development Saxony-Anhalt 2010

(19) Martin Krems, "Die IBA-Städte und ihre Themen," in "Die anderen Städte" IBA Stadtumbau 2010



空き地による連続性の分断等を避けるために、ポケット・パークがつくられている



リハビリ中の家屋も、ちょっと洒落た看板で覆われている

事例5：アッシュースレーベン

アッシュースレーベンは人口が3万2千人弱の中都市である。世界遺産のあるケドリンプルクの東に位置し、マグデブルクから自動車で1時間ほどの距離にある。オートバーンは走っていない、広域圏からの自動車によるアクセスは必ずしもよくない。アッシュースレーベン市はザクセン・アンハルト州で最古の町であり、またドイツでもしっかりと保全された城壁と城内が残る数少ない町でもある。ただし、19世紀の終わり頃からアッシュースレーベンは中規模の工業都市として成長する。これは、北部にあるリグナイトの炭鉱と鉄道の便がよかったためである。しかし、その工業都市としての位置づけは1990年を境に大きく変容する。多くの工場が閉鎖され、1990年に2万3500人いた人口は2008年には2万7112人まで減少した⁽²⁰⁾。

アッシュースレーベン市は長期的な計画として、都市構造を変容させることを検討している。新しいライフスタイル、通勤形態、縮小人口に対応するためである。しかし、これは大変難しいことでもある。現段階では、IBA ザクセン・アンハルトの戦略として、郊外にある1200戸の住宅が倒壊された。それと同時に、城郭内では家屋の修復事業が展開している。特に問題として捉えられたのが城郭の外側を走る環状道路である。この道路では一日当たり1万7千台の自動車が行き交っており、沿道は自動車公害に悩み、多くの家主がそこを立ち去っていた。ある地区では空き家率は75%にも達していた。この状況に対応するために同市では、2003年から永久的にこの環状道路の沿道の住宅を他の用途に置き換えるよう動き始めている⁽²¹⁾。

そこで、IBA ザクセン・アンハルト事業の一環として、環状道路沿いの建物が駐車場に置き換わった場所を道路から見られないように巨大な看板で視界を遮るようにした。これらの看板は、ちょっとポップな絵が描かれており、お洒落である。家が壊されて駐車場になることで、街並みの連続性が視界的に遮断されてしまうことをこれらの看板は回避している。看板は家ではないので、用途面という観点からは連続性は途絶えてしまうが、景観面では少なくともスカイラインの

(20) International Building Exhibition, Urban Development Saxony-Anhalt 2010

(21) Martin Krems, "Die IBA-Städte und ihre Themen," in "Die anderen Städte" IBA Stadtumbau 2010

連続性は確保できる。それが駐車場であるか看板であるかでは大きな差がある。

この事業は、都市が縮小することのダメージを安上がりに軽減している優れた施策であると考えられる。少年がブランコをしている女の子のパンツを覗き込んでいる図柄は、ちょっと理解しにくいですが、全般的には興味深い試みであり、日本でもシャッター商店街などに適応できそうだ。テナント等が入らないと中心市街地でも駐車場に転用する地主が多いが、それによって櫛が抜けるように周辺にもマイナス効果を及ぼす。それらに対応するためにも、このアッシュスレーベンの試みは興味深い。また、これらの沿道は夜にはライトアップしている。IBAはこの環状道路を用いて、都市再開発の途上の空間利用の有用性を検証しているのである。



都心部の端にある随分と傷んだ建築群



修復が進んでいない城壁内の建物



ファサードの空間的連続性を維持するために配置された巨大な看板



看板に隠された裏側には駐車場が整備されている



看板の図柄は多少、物議を醸すようなものとなっている

5. まとめ

以上、ザクセン・アンハルト州の縮小政策を概観した。ドイツ在住のジャーナリストの熊谷徹は、日本がドイツから学べることの一つとして「『人口減少の時限爆弾』の秒読みが進んでいることを、全ての国民が自覚し、本格的な対策を取るべきだということである」と指摘する⁽²²⁾。

ドイツは伝統的に将来計画をしっかりと策定し、それに則って望ましい将来を形成するということが得意である。ドイツの土地利用計画の将来展望の確かさ、法律を遵守するという姿勢が、整然とした国土利用を具体化できた理由である。そのような計画された将来の形成能力に秀でているドイツが、いかにこの「人口縮小」に対応するかは、同様に人口減少を体験することになる日本においては参考になる点が多くある。特に、ザクセン・アンハルト州はIBA というボトムアップ・アプローチを縮小政策の核として位置づけているために、理論的というよりは実践的な対応が図られており、日本においても参考となる点が多いと考えられる。

ザクセン・アンハルト州の試みは「縮小」という現実をしっかりと見据えて、人々に、その将来を展望させることにある。IBA ザクセン・アンハルトでは、同州が縮小時代において必要とするのは、「将来へのビジョン」、「創造性」、「試みる勇氣」であるとしている。困難な問題と対峙した場合、それから目を背けるのではなく、しっかりと将来を睨み、勇氣を持って創造的に問題に取り組む、というもはや精神論のような事柄を挙げているが、縮小時代には、今までの延長線上とは異なる状況に放り込まれる、という認識が何より必要であると考察させる。

ザクセン・アンハルト州の縮小プログラムには安易な処方箋は一切ない。人口の減少が留まることや、ましてや人口が増加することなどの楽観論は議論の俎上にもあがってこない。これは、安易な楽観論はむしろ将来により大きな禍根を残すというリアリスティックな考えが根底にあるからだと思われる。ドイツ人は全般的に宗教心が低いと言われる。神頼みや奇跡を期待せずに、人口が減少するのであれば、それにいかに対応していくか。いかにこの逆風の中、地域そして都市、コミュニティを守っていくのか、という現実的な課題を解決させようとする。

勿論、現実的に考えれば処方箋が得られる訳ではない。しかし、現実的に考えることで見えてくることもある。なぜ、都市が存在するのか。都市とはそもそも何であるのか。なぜ、人々はあんな都市で生活していくのか。このようなそもそも論に立ち返ってこそ、みえてくる課題もある。

経済的なロジックで縮小現象を解析しようとする、旧東ドイツの都市や地域はもはや存在理由を見出すことが難しくなる。元連邦大統領のホルスト・ケーラー氏は2004年9月にドイツのニュース週刊誌の取材で「旧東ドイツで自分の気に入る仕事が見つからなかったら、そのような仕事がある地域へ移り住むことも考えるべきである」と述べた⁽²³⁾。しかし、経済的なロジック

(22) 熊谷徹, 『ドイツ病に学べ』新潮選書, 2006 (p.218)

(23) 熊谷徹, 『ドイツ病に学べ』新潮選書, 2006 (p.82)

だけで人々は生きている訳ではない。そのような考えからか、19のプロジェクトの中の多くが、都市のアイデンティティを強化させる試みをしていることが興味深い。それは、都市のアイデンティティの再定義であるとも考えられる。IBAのプロジェクトは、産業構造が崩壊し、人口縮小に喘いでいる都市の将来像を模索するという過程を通じて、新たな都市のアイデンティティを定義し直そうという試みであるとも捉えられる。そして、日本の人口減少都市、人口減少地域において求められるのも、雇用を創出する産業を誘致することや、新たな出生率の増加、Iターン者の確保といったような付け焼き刃的な対応などではなく、この新たな人口減少時代における都市のアイデンティティの再定義であると考えられる。人口減少が進むということは、従来の経済構造の枠組みの中では、その都市、地域がもはや重要性を失っているということでもある。そのような状況下、自らが変わること、自らが変革していくことが必要であるということをIBAのプログラムは示唆している。「教育」のプログラムが4つもあるということ、他のプログラムでも「教育」的な要素が少なからず含まれていることは、この自らが変革するということの必要性を市民に理解させることの重要性を強く認識しているからだと考えられる。

同様に産業構造が変化することで、基幹産業が衰退したIBA エムシャーパークでも、そのようなアプローチが為された。ルール工業地方というドイツ、いやヨーロッパをも代表する工業地域が、産業構造の転換によってその存在意義、アイデンティティを大きく揺さぶられた中、IBA エムシャーパークでは、新しい21世紀のためのルール地方の定義を模索し、その試みは相当の成果を得ることができた⁽²⁴⁾。IBA ザクセン・アンハルトでもエムシャーパークと同じような地域のアイデンティティを変革させていく契機となるようなプロジェクトの成功を期待している。

ドイツはヨーロッパの国の中でも特に日本と共通点が多くみられる。産業構造の転換によって経済的なダメージを受けつつ、そこから新たな将来展望が見出せない阪神工業地帯はIBA エムシャーパークを実践したルール工業地帯と共通項が多く見られるし、また縮小という現象によって地域から活力が削がれており、成長を前提とした将来像の考え方を大きく転換しなくてはならない日本の多くの地域・都市は本文で整理を試みたザクセン・アンハルト州との共通項がみられるであろう。IBA ザクセン・アンハルトが「教育」や新たな価値を有する公共空間のデザインに力を入れ、地域アイデンティティを再定義することを試みたように、日本の縮小都市・縮小地域においても、そのようなアプローチが必要ではないかと考えられる。縮小する都市・地域に求められるのは、新たな将来像、そして自らの存在基盤でもあるアイデンティティを再考することであろう。そして、それはトップダウンではなく、そこで日々生活する人々が共有するものであることが、ザクセン・アンハルト州の体験から理解できる。

(24) Christa Reicher, Thorsten Schauz, "IBA Emscher Park"